

第2章 TAIに期待される効果と誤謬

本章では、第1章で導入したObjective-TA[®]に期待される効果を考察します。そして、その有効性を議論します。また、このような解析を経て、初期にTAが導入されたときに期待された成果と、TAという言葉が日本に根付いていない現状の原因の一端が、その期待する効果に対する誤謬にあったのではないかと考えることを考えます。Objective-TA[®]を考えることによって、TAに期待される成果の意義を再確認してみたいと思います。

2.1 Objective-TA[®]実施のインセンティブ

ビッグ・サイエンス(巨大技術革新)に関するTAは、そのテクノロジーの社会的な影響が極めて大きく、負(-)の影響が懸念されるときに実施されてきました。このときの実施主体は、行政や官公庁などでした。このような従来行われていたTAに関する検討や議論は、過去にも多くの成書が示され、省庁などによっても多くのまとめがなされていますので、それらの書籍に譲ることにしたいと思います。

本書では、身近なTA、すなわち目的に合った等身大のTAであるオブジェクティブTA(Objective-TA[®])を提起しようとしています。

身近にある技術に関してTAに取り組む動機として、どのようなことが考えられるでしょう。例をあげてみます。たとえば、隣町の大規模商業施設開発事業について、周辺住民会が開催され、商業施設の設備技術に関わるTAを実施することになったと仮定します。そして、広域行政地域の共同下水処理施設が建設され、3年後に運転を始めるとします。この場合には、その施設に採用される下水処理技術についてのTAが考えられます。

また、工業団地に大手製造業の工場が更新される場合には、新規設備に関する周辺への影響などを考慮したTAが考えられるでしょう。

さらに、15年前に閉鎖された工場にアスベストが大量に使用されていたことが明らかとなった場合には、それをどのように処理すべきなのか、対応技術と対策の計画についてのTAが考えられます。

いくつかの例をあげてみましたが、これらの身近なTA、すなわちObjective-TA[®]は、明確なインセンティブがあって実施されると考